

## ご縁

第7期生 清水 啓介

私は、日常生活の中でよく「ご縁」という言葉を耳にする。ご縁とは、その事柄を成立に導く不可視の要因のようなものである。人と初めて会った時、幸運に巡り合った時、就職活動で企業から不採用の通知が来た時、ありとあらゆる場所で私はその言葉を耳にしてきた。私は、2009年3月末より小野ゼミに所属し、小野先生のご指導を2年間にわたって受けるという大変貴重なご縁に巡り合うことができた。ところが小野先生とのご縁は、実は極めて太く、そして長いものであった。なぜなら、小野先生とのご縁は12年前から始まっており、しかも私1人のみならず、私の一族にも関係してくるからである。

私と小野先生のご縁の始まりは、私の長兄からであった。当時私は小学4年生、一番上の兄は慶應義塾大学商学部の3年生であった。当時、長兄が所属していたゼミが、小野先生の恩師である清水猛先生のゼミであった。清水猛先生のゼミは、小野ゼミの源流とでもいうべきゼミであり、その活動内容や気質も、小野ゼミと共通するところが非常に多い。長兄の同期が、事あるごとに我が家に押しかけ、グループワークや飲み会を開いていたことはよく覚えている（11年後には、私が当時の長兄と全く同じ立場に立たされることになるとは夢にも思わなかったが……）。また、20世紀最後の年に、三田祭における清水猛先生のゼミの三田論を見に行ったことも、おぼろげではあるが覚えている。そんなある日、長兄が1冊の冊子を持って私のところにやってきた。「三田商学研究」と書かれた冊子を長兄はバラバラとめくり、ある論文の文末脚注を指さし、「俺がこの人の調査に協力したんだ」と、得意気に言って見せてくれた。その論文こそが、大学院時代の小野先生の論文だった。私自身と小野先生のご縁はここから始まっていたのかもしれない。なお、その冊子は、今でも我が家に大切に保管されている。その後長兄はイギリスのノッティンガム大学に留学したが、修士論文を書く際に、小野先生に大変お世話になったという。さらに、一昨年長兄が結婚式を挙げた時には、わざわざご足労いただいた。また私の次兄は、清水猛先生のゼミには所属しなかったものの、在学中、小野先生が受け持たれていた英語の授業を受講していた。そして、私は小野先生が



マケ論の仲間と、恩師と共に（著者は後列右端）

指導する小野ゼミに所属し、今そこから巣立とうとしているわけである。

このように、3兄弟計12年からなる太くて長いご縁があったわけである。しかし、私は先生との貴重なご縁を卒業とともに希薄になることを望まない。恩師とのご縁を切るのがもったいないということもあるが、小野ゼミを通じて得られた数多くのご縁をも切ってしまうことになるからである。小野先生とのご縁、小野ゼミを通じて得たご縁。この2つを武器にして、私は新たな人生へ乗り出していきたい。